

### 13.自然災害はなぜ怖いのか、起きるまではわからないことだらけ

自然災害は、突然に予期せぬ状況になること、二次的なものも含めて被害が読めないこと、そもそも現象を抑止できないこと、被害は広範囲に及び影響が深く広く波及すること等が特徴としてあります。そして、その影響は人命、モノ、メンタル、社会構造の変化にまで及ぶもので、それも想定できないものになります。

そういうところから、我々人類は、いかにして自然災害を受けないように、避けるようにと経験を積み重ねながら、暮らしが安定して続くようにと苦勞してきた歴史を有しています。いわば、災害と共存しながら生活、生産を続けてきたわけですが、その結果、逆に災害になれてしまったところもあります。昔は人口も多くなく、狩猟採取から定住の初期の暮らしでは、自然のシステムの中で何とか安全を確保するだけの余裕というか許容もあったのかもしれませんが。ある意味では自然災害の怖さを実感していて、自然環境に敏感であったかもしれませんが。しかし、科学技術が発達して人口が増えてくると、自然環境の改変が始まります。改変も回復可能な負荷が少ない間は時間の経過で復元もできたわけですが、その限界を超えるほどになってくると、自然のサイクルにも大きな狂いが生じてきます。その端的な例は地球温暖化で、人間の利便性を追求した生活スタイルが自然のサイクルに大きくかかわったことであるといわれています。その結果として、海水温の変化、気象の変化となって、猛暑、干ばつ、連続降雨、台風の巨大化などとなっているものです。つまり、これまでの経験知では収まらないほどの変化になりますので、これまで設定していた安全率さえも超えるというような事態になってきています。まさに、想定外のことが次々に起きているのです。

自然災害には発生公式のようなものはありません。それは社会構造、人間の暮らし方と深く関係しているからです。まさに不確実性の世界なのですが、確かなことは、自然現象による直接的な災害ですので、基本的な素因は地形・地質や環境にあり、誘因は気象的事象であるということになります。

なんといっても自然災害の影響は文明が進むほど、我々の暮らしで機能的利便性追求が進む中で、確実に進化しています。それは被害の対象となる財産が蓄積していること、グローバルな社会構造が構築されているので、被害が様々な領域に飛び火することです。加えて、自然との距離を置いた生活パターンになっていて、自然のサイクルを無視した行為がなされていることです。その根底には人口増やその密集ということがあります。

今後とも自然災害は避けられないものではありませんが、その災害を促進するような行動があれば抑制しなければなりませんし、自然のサイクルに収まる範囲での暮らし方が求められているのだと思います。今、健全という言葉が死語のようにないのでしょうか？健全とは活動に欠陥や偏りがない様子と説明されますが、まさに私たちの暮らし方が度を過ぎていることはないか、適正な循環的な暮らし方を意識しているのか、これまで自然が教えてくれた経験が生かされていないか、科学技術がすべての頂点だというおごりを災害のたびに感じてしまいます。